

©Derwent Information

## Agent for external application to skin contains ceutella asiatica extracts and vitamin(s) A E D or C

**Patent Number : JP63079809***International patents classification : A61K-008/67; A61K-008/96; A61K-008/97; A61Q-019/08; A61K-008/30***• Abstract :**

JP63079809 A 0.0001-5.0 wt% of ceutella asiatica extracts and 0.0001-5.0 wt% of one or more selected from vitamin A, E, D or C, are contained.

**• Publication data :**Patent Family : JP63079809 A 19880409 DW1988-20 Jpn \*AP: 1986JP-0224565 19860922Priority n° : 1986JP-0224565 19860922Covered countries : 1Publications count : 1**• Patentee & Inventor(s) :**Patent assignee : (SHIS) SHISEIDO CO LTDInventor(s) : IGARASHI A; NAKAYAMA Y**• Accession codes :**Accession N° : 1988-137247 [20]Sec. Acc. n° CPI : C1988-061341**• Derwent codes :**Manual code : CPI: D08-B09ADerwent Classes : D21**• Update codes :**Basic update code : 1988-20**Others :**

ICAA

*A61K-008/67 [2006-01 A F I R - -]; A61K-008/96 [2006-01 A L I R - -]; A61K-008/97 [2006-01 A - I R - -]; A61Q-019/08 [2006-01 A L I R - -]*

ICCA

*A61K-008/30 [2006 C F I R - -]; A61K-008/96 [2006 C - I R - -]; A61Q-019/08 [2006 C L I R - -]*

EC

*A61K-008/67; A61K-008/97; A61Q-019/00*

## ⑫ 公開特許公報(A)

昭63-79809

⑬ Int.Cl.<sup>4</sup>  
A 61 K 7/00

識別記号

庁内整理番号  
7306-4C

⑭ 公開 昭和63年(1988)4月9日

審査請求 未請求 発明の数 1 (全5頁)

⑮ 発明の名称 皮膚外用剤

⑯ 特 願 昭61-224565

⑰ 出 願 昭61(1986)9月22日

⑱ 発 明 者 五十嵐 敦子 神奈川県横浜市港北区新羽町1050番地 株式会社資生堂研究所内

⑲ 発 明 者 中山 靖久 神奈川県横浜市港北区新羽町1050番地 株式会社資生堂研究所内

⑳ 出 願 人 株式会社資生堂 東京都中央区銀座7丁目5番5号

## 明細書

## 1. 発明の名称

皮膚外用剤

## 2. 特許請求の範囲

(1) ツボクサ抽出物と、ビタミンA、E、D及びCから選ばれる一種あるいは二種以上のビタミンとを含有することを特徴とする皮膚外用剤。

(2) ツボクサ抽出物の配合量が全量に対して0.0001~5.0重量%(乾燥固形分)である特許請求範囲第(1)項記載の皮膚外用剤。

(3) ビタミンの配合量が全量に対して0.0001~5.0重量%である特許請求範囲第(1)あるいは第(2)項記載の皮膚外用剤。

## 3. 発明の詳細な説明

[産業上の利用分野]

本発明はツボクサ抽出物と、A、E、D及びCのビタミンの一種あるいは二種以上とを配合することを特徴としてなり、肌荒れ改善効果、角質改善効果、ターンオーバー速度促進効果、創傷治癒

促進効果に優れ、皮膚の老化を防止する効果を有する皮膚外用剤に関する。

[従来の技術]

荒れた肌は、乾燥して皮膚内の水分量が減少するとともに角質細胞の機能が低下することなどによっておこる。特に冬期の空気が乾燥した時に悪化しやすく、このような状態を改善する為には、皮膚のターンオーバーを高めるとともに、皮膚機能を正常に維持することが必要であり、各種の薬剤が開発されてきた。

従来の方法としては、皮膚表面に皮脂類似組成物あるいは保湿剤を塗布し、皮膚を被うことにより乾燥を防止したり、ビタミンE剤等により皮膚の血行を促進させる方法がとられてきたが、その効果はいまだ十分ではなく、効果を期待するには、およばなかった。

[発明が解決しようとする問題点]

本発明者らは、肌荒れ防止、肌荒れ改善効果を高め皮膚の老化を防止する方法はないものかと鋭意研究した結果、ツボクサ抽出物に新たに皮膚の

ターンオーバーを早める作用が有ることを見出し、このことに着目して研究した結果、ツボクサ抽出物を配合した皮膚外用剤を経皮的に投与した場合、創傷治癒、肌荒れ防止、肌荒れ改善、老化防止の効果に優れていることを見出した。さらに、ツボクサ抽出物に加えて、ビタミンA、E、D及びCのいずれか一種あるいは二種以上のビタミンを併用することによって、さらにその効果が増強されることを見出し、本発明を完成するに至った。

〔問題点を解決するための手段〕

すなわち本発明は、ツボクサ抽出物と、ビタミンA、E、D及びCから選ばれる一種あるいは二種以上のビタミンとを含有することを特徴とする皮膚外用剤である。

以下、本発明の構成について詳述する。

本発明に用いられるツボクサ抽出物は、例えば以下の方法で得られる。

ツボクサの葉を、溶媒、例えばメタノールやエタノールのような低級アルコール、含水低級アルコールあるいは1,3-ブチレングリコール、ア

ロピレングリコールまたは含水多価アルコール等と共に加熱還流し、濾過して得られる抽出液を濃縮して得られる。

本発明に用いられるツボクサ抽出物の配合量は、皮膚外用剤全量中乾燥固形分として0.0001~5.0重量%である。

本発明においては、上記ツボクサ抽出物に加えて、ビタミンA、E、D及びCのいずれか一種あるいは二種以上のビタミンを配合する。

上記ビタミンの配合量は、皮膚外用剤全量中の0.0001~5.0重量%である。

ツボクサ抽出物あるいはビタミンA、E、D及びCのいずれか一種あるいは二種以上のビタミンの配合量が0.0001重量%未満ではその効果が乏しくなる傾向があり、逆に5.0重量%を越えて配合しても効果の大きな増大は望むことは出来ない。

本発明の皮膚外用剤は前記の必須成分に加えて必要に応じて、本発明の効果を損なわない範囲内で、化粧品、医薬部外品、医薬品等に一般に用いられる各種成分、すなわち水性成分、粉末成分、

油分、界面活性剤、保湿剤、増粘剤、防腐剤、酸化防止剤、香料、色剤、薬剤等を配合することが出来る。

また本発明の皮膚外用剤の剤型は任意であり、例えば化粧水等の可溶化系、乳液、クリーム等の乳化系あるいは軟膏、分散液などの剤型をとることができる。

〔発明の効果〕

ツボクサ抽出物の肌荒れ改善効果、角質改善効果、老化防止効果を示すために次の表皮ターンオーバー速度促進作用試験及びヒト皮膚による肌荒れ改善効果試験を行った。

(モルモット皮膚を用いた表皮ターンオーバー速度促進作用試験)

アルビノモルモットを1群8匹として評価に用いた。モルモットの背部皮膚を剃毛後、蛍光色素であるダンシルクロライドを5重量%配合した白色ワセリン軟膏0.1ml/cm<sup>2</sup>を24時間閉塞塗布した。ツボクサ抽出物を白色ワセリンに0.5、1.0、2.0%添加したものを、さらにコントロールには白色ワ

セリンのみを1日1回0.3mlずつダンシルクロライド塗布部に重ね塗り、皮膚の角質層ターンオーバー速度はダンシルクロライドが消失するまでの日数をもって評価した。

結果を表-1に示す。

(以下余白)

表-1

試料	消失日数(日)
白色ワセリン	150.5±0.2
ツボクサ抽出物 0.5%	14.8±0.8
" 1.0%	11.3±0.3
" 2.0%	10.1±0.2

(以下余白)

表-1の結果から、ツボクサ抽出物はコントロールと比較して表皮のターンオーバーを速めることが明らかとなった。

(ヒト皮膚による肌荒れ改善効果試験)

実施例1で得た化粧水とブランク化粧水(ツボクサ抽出物及びビタミンEアセテートを配合しないもの)を用いて人体パネルで肌荒れ改善効果試験を行った。

すなわち、女性健常人(顔面)の皮膚表面形態をミリスン樹脂によるレプリカ法を用いて肌のレプリカを取り顕微鏡(17倍)にて観察する。皮紋の状態及び角層の剥離状態から表-2に示す基準に基づいて肌荒れ評価1、2と判断された者(肌あれパネル)25名を用い、顔面左右半々に、実施例1で得た化粧水とブランク化粧水を1日1回2週間塗布した。

2週間後、再び上述のレプリカ法にて肌の状態を観察し、表-2の判定基準に従って評価した。

表-2

評点	評 価	備 考
1	皮溝、皮丘の消失 広範囲の角層のめくれ	荒れ肌
2	皮溝、皮丘が不鮮明 角層のめくれ	
3	皮溝、皮丘は認められる が平坦	
4	皮溝、皮丘が鮮明	美しい肌
5	皮溝、皮丘が鮮明で整っている	

(以下余白)

結果を表-3に示す。

表-3

レプリカ 評価	実施例1の 化粧水	ブランクの 化粧水
1	0名	10名
2	1名	8名
3	0名	7名
4	12名	0名
5	12名	0名

この結果より、ツボクサ抽出物及びビタミンEアセテート配合の化粧水を使用した顔面部位はブランク化粧水を使用した顔面部位と比較し、顕著な肌荒れ改善効果が認められた。

[実施例]

次に実施例により本発明をさらに詳細に説明する。尚、本発明はこれにより限定されるものではない。配合量は重量%である。

実施例 1	化粧水
(1) ツボクサ抽出(エタノール)物	0.05
(2) ビタミンEアセテート	0.001
(3) グリセリン	4.0
(4) 1,3-ブチレングリコール	4.0
(5) エタノール	7.0
(6) ポリオキシエチレン オレイルアルコール	0.5
(7) メチルパラベン	0.05
(8) クエン酸	0.01
(9) クエン酸ソーダ	0.1
(10) 香料	0.05
(11) 精製水	残余
(製法)	

精製水にクエン酸、クエン酸ソーダ、グリセリン、1,3-ブチレングリコール、ツボクサ抽出物を溶解する。別にエタノールにポリオキシエチレンオレイルアルコール、香料、メチルパラベンを溶解し、これを前述の精製水溶液に加えて可溶化し、濾過して化粧水を得た。

実施例 2	クリーム
(1) セトステアリルアルコール	3.5
(2) スクワラン	40.0
(3) ミツロウ	3.0
(4) 還元ラノリン	5.0
(5) エチルパラベン	0.3
(6) ポリオキシエチレン(20) ソルビタンモノバルミチン酸 エステル	2.0
(7) ステアリン酸モノグリセリド	2.0
(8) ツボクサ抽出(エタノール)物	1.0
(9) ビタミンAアセテート	2.0
(10) 香料	0.03
(11) 1,3-ブチレングリコール	5.0
(12) グリセリン	5.0
(13) 精製水	残余
(製法)	

(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)と(10)を加熱溶解し75℃に加温した(8)(9)(11)(12)と(13)に攪拌しながら加え

る。ホモミキサー処理し乳化粒子を細かくした後、攪拌しながら急冷し、クリームを得た。

実施例 3	乳液
(1) ツボクサ抽出(エタノール)物	0.001
(2) ビタミンC硫酸	0.005
(3) ステアリン酸	1.5
(4) セチルアルコール	0.5
(5) ミツロウ	2.0
(6) ポリオキシエチレン(10) モノオレイン酸エステル	1.0
(7) クインスード抽出物 (5%水溶液)	20.0
(8) プロピレングリコール	5.0
(9) エタノール	3.0
(10) エチルパラベン	0.3
(11) 香料	0.03
(12) 精製水	残余
(製法)	

エタノールに香料を加えて溶解する(アルコール相)。精製水にプロピレングリコールを加えて

加熱溶解して70℃に保つ(水相)。クインスード抽出物を除く他の成分を混合し、加熱溶解して70℃に保つ(油相)。水相に油相を加えて予備乳化を行ない、ホモミキサーで均一に乳化する。これを攪拌しながらアルコール相とクインスード抽出物を加える。その後攪拌しながら30℃に冷却して乳液を得た。

実施例 4	パック
(1) ツボクサ抽出(含水エタノール1:1) 物	0.1
(2) ビタミンD	0.01
(3) ポリビニルアルコール	15.0
(4) ポリエチレングリコール	3.0
(5) プロピレングリコール	7.0
(6) エタノール	10.0
(7) メチルパラベン	0.05
(8) 香料	0.05
(9) 精製水	残余
(製法)	

精製水にポリエチレングリコール、プロピレン

グリコール、メチルパラベン、ツボクサ抽出物及びビタミンDを加え攪拌溶解する。つぎにポリビニルアルコールを加え加熱攪拌し、香料を溶解したエタノールを加え攪拌溶解してパックを得た、  
実施例 6 軟膏

ホモミキサーで均一に乳化後冷却して軟膏を得た。

特許出願人 株式会社 資生堂

(1) ツボクサ抽出(1,3-アチレングリコール)物	5.0
(2) ビタミンEアセテート	1.0
(3) ビタミンAパルミテート	0.5
(4) ステアリルアルコール	18.0
(5) モクロウ	20.0
(6) ポリオキシエチレン(10)モノオレイン酸エステル	0.25
(7) グリセリンモノステアリン酸エステル	0.25
(8) ワセリン	40.0
(9) 精製水	15.0

(製法)

精製水を70℃に保ち(水相)以下の成分を70℃にて混合溶解する(油相)。水相に油相を加え、